

令和 4 年 6 月 22 日現在

機関番号：84301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2021

課題番号：16K16345

研究課題名(和文)対話とハンズ・オン教材を組み合わせた博物館教育の実践と研究

研究課題名(英文)Museum Education Practice and Research: Combining Conversation with Hands-On Materials

研究代表者

水谷 亜希 (MIZUTANI, Aki)

独立行政法人国立文化財機構京都国立博物館・学芸部教育室・主任研究員

研究者番号：20565296

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本課題では、京都国立博物館で京博ナビゲーター(ボランティア)が実施する「ミュージアム・カート」を対象として、対話とハンズ・オン教材を組み合わせた博物館教育の実践と研究を行った。研究を通して、来館者の主体的な興味・関心を引き出すための具体的な実践方法を記録し、記録集として公開した。また、アンケート結果や記録を分析し、この活動がもたらす効果を明らかにし、論文として公開した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、これまで古美術や文化財とあまり関連付けてこられなかった「ハンズ・オン」や「対話」を、教育プログラムに積極的に導入し、その活動を分析することで、他の教育プログラムにも援用可能な原則や手法を明らかにした。

新型コロナウイルスの感染拡大を受け、利用者数を主とした評価の見直しが迫られる時勢において、本研究で明らかになった「博物館が利用者にも与える影響」の事例は、今後の博物館教育の展開だけでなく、博物館そのものの在り方を考察するための一助になるものと考えている。

研究成果の概要(英文)：We practiced and researched museum education combining conversation and Hands-On activities for the "Museum Cart" conducted by "Kyohaku Navigators(volunteers)" at Kyoto National Museum. We documented and publicized specific methods we implemented that were effective in eliciting visitors' subjective interests. Visitor surveys and activity records were also analyzed to clarify the effects of this activity and published as a paper.

研究分野：博物館教育学

キーワード：文化財 ハンズ・オン 対話 鑑賞 ボランティア 美術 教育普及

1. 研究開始当初の背景

京都国立博物館では2014年9月の平成知新館のオープンとともに、ミュージアム・カートの運用と、そこで来館者と対話する「京博ナビゲーター」の活動を開始した。これらは、開かれた博物館を目指す取り組みの一つであり、「来館者が展示品に親しみ・理解を深めるためのきっかけづくり」を目標として始まった。ミュージアム・カートにはハンズ・オン教材が設置され、来館者は京博ナビゲーターとの対話を楽しむことで、展示品への理解を深めることができる。

研究開始当初、ミュージアム・カートは運用約1年を経ており、来館者から好評を得る一方、既存の教材について、現状把握と改善が十分にできていないことや、追加予定の新たな教材について検討が必要であるなど、いくつかの課題を抱えていた。

2. 研究の目的

本研究では、ミュージアム・カートの約1年の運用から見てきた課題をもとに、ハンズ・オン(1)と対話(2)を組み合わせたこの教育プログラムが、どうすればより効果的になるのかを考察し、実践、普遍化するものである。すなわち、来館者の主体的な興味・関心を引き出すために、ハンズ・オン教材をどのように活用し、どのような対話を行うことが最も有効であるかを明らかにし、他の教育普及活動にも援用可能な原則や手法を明らかにすることを目指している。

「ミュージアム・カート」は、これまで主に科学系や自然史系、歴史・民俗系の博物館において実践されてきた「ハンズ・オン」の手法と、近現代美術を扱う美術館で実践されてきた「対話」の手法を組み合わせ、古美術を中心とした文化財を収蔵する博物館で実践するものである。

これまでのハンズ・オン展示は、無人での運用を前提としたものが多く、耐久性や盗難防止の点から、できることに限りがあった。また博物館でのボランティア活動は、従来は解説型が多く一方的な話しかけになりがちで、来館者の主体的な興味・関心を引き出すことが難しかった。本研究で行う、対話とハンズ・オンを組み合わせた取り組みは、それら両方の問題点を解決する糸口となるものである。本研究の成果を公表することで、今後の博物館教育や、博物館でのボランティア運営に新しい方向性を示すことができると考える。

さらにミュージアム・カートは、当館の頻繁な展示替えに対応するため、各分野の基礎的な情報に関連する教材を扱っており、それらは結果的に他の博物館にも応用可能な内容となっている。2014年からの運用1年間だけでも、他館からの取材や視察をいくつも受けており、この取り組みが注目されていることが推察された。本研究の成果は、自館のみならず全国の博物館の教育普及活動に寄与すると考える。

(1) ティム・コールトン著、染川香澄ほか訳『ハンズ・オンとこれからの博物館 インタラクティブ系博物館・科学館に学ぶ理念と経営』東海大学出版部、2000年

笠原喜康『ハンズオン考 博物館教育認識論』東京堂出版、2015年

(2) アメリア・アレナス 著・福のり子 訳『なぜ、これがアートなの?』淡交社、1998年

上野行一『風神雷神はなぜ笑っているのか 対話による鑑賞完全講座』光村図書出版、2014年

3. 研究の方法

前半期間（平成 28～29 年 / 2016～2017）

研究の前半では、ミュージアム・カートの教材と実践方法について現状調査を行い、課題の洗い出しと改善を行った。具体的には、毎日の終礼で京博ナビゲーターの意見を集約し、来館者アンケートから、ミュージアム・カートに関するコメントを収集、分析した。また、第 1 期ナビゲーターの活動終了に合わせて、活動全体に関するアンケート調査をナビゲーターに実施した。さらに、国内で先進的な教育活動を行う他館の視察を行った。これらを踏まえ、次の改善を行った。

〔改善内容〕

- ・外国人旅行者に対応するためのツールの追加（多言語解説シートなど）
- ・既存教材の改良
- ・新規教材の追加
- ・期間限定の教材の設置（特別展・特集陳列期間中）
- ・ミュージアム・カートを発展させたワークショップの開発・実践（特別展の期間中、年 2 回）
- ・ナビゲーター用の交流サイト（ポータルサイト）の運用開始

後半期間（平成 30 年、令和 2～3 年 / 2018、2020～2021）

研究の後半では、前述の調査・分析や改善を踏まえ、論文等を執筆、公開した。

水谷亜希・烏賀陽梨沙「京都国立博物館におけるボランティア活動の展開とその意義 京博ナビゲーター」(『学叢』第 42 号、京都国立博物館、2020 年)は、第 1 期ナビゲーター(2014～2017)に対して行ったアンケートの結果をもとに、研究協力者である当館調査員(烏賀陽梨沙氏)と共著で執筆した。研究代表者が、活動の概要や活動開始に至った経緯、来館者の反応や課題について執筆し、烏賀陽氏は、質的・混合法データ分析ソフトを使用し、この活動が京博ナビゲーターに与えた影響を分析・考察した。分析に使用したアンケートは、3 年間継続して活動した第 1 期ナビゲーター 137 名のうち、90 名から回答を得たものである。

『京博ナビゲーター活動記録 2014(平成 26)～2020(令和 2)年』(京都国立博物館、2021 年)は、第 2 期京博ナビゲーター(2017～2020)が、来館者との印象的なエピソードを 150 文字で執筆したものを、過去 6 年間の記録とともに整理・掲載したものである。エピソードは、3 年間継続して活動した第 2 期京博ナビゲーター 198 名のうち、72 名からの投稿があった。

水谷亜希「コロナ禍で再認識した「さわる」「話す」の重要性」(『美術による学び』第 2 巻、日本・美術による学び学会、2021 年)では、「さわる」「話す」がもたらす効果を考察した。

「京都国立博物館におけるボランティア活動について」(兵庫県立美術館ミュージアム・ボランティアコーディネーター養成セミナー、2022 年)は、本課題の研究成果を踏まえて、研究代表者が、兵庫県立美術館のミュージアム・ボランティアに向けて講義を行ったものである。

研究の後半期間のうち、令和 2～3 年度(2020～2021)は、新型コロナウイルスの影響を大きく受け、来館者に向けた京博ナビゲーターの活動(ミュージアム・カート/ワークショップ)が実施できない状態となった。そのため、企画していたワークショップを別の活動に転用したり、新たに非接触の教育プログラムを実施するなどした。さらに、感染症が流行する中での教育普及活動、ボランティア運営について他館の事例を調査し、あわせて当館が新たに実施した教育普及プログラムの情報を全国の教育普及担当に向けて発信した。

4. 研究成果

第 1 期京博ナビゲーターを対象としたアンケートの分析からは、次のことが明らかになった。

まず教材に関しては、取り扱いに特殊な技術が必要ではなく、手を動かして関わることで達成感の感じられる教材や、元となった作品がほぼ常に展示されている教材は、ナビゲーター自身が扱うことを好んでおり、来館者とのやり取りも活発であることが想定された。逆に、取り扱いにある程度の修練が必要なものや、触れられるものの、動きに乏しい教材は、ナビゲーターも取り扱いに苦手意識を持っており、来館者の興味・関心も引き出しづらいことが推測された。

あわせてアンケート結果からナビゲーター自身への影響についても考察し、博物館での活動が、「自己」「仲間」「社会」の幾層にもおよんで、「学ぶ楽しさ喜びの共有・共感」を要諦にした豊かな経験をナビゲーターにもたらしていたことが明らかになった。

第2期ナビゲーターによる記録集へのエピソード投稿では、来館者とナビゲーターの生き生きとしたやり取りを記録として残すことができた。これらは、来館者の興味・関心を引き出した具体的なやり取りを示すとともに、博物館で人は何を感じ、どんな影響を受け、何を持ち帰ることになったのかを示す貴重な証言でもある。これらの情報は、来館者数をカウントするだけでは決して分からない情報であり、ポジティブな意見が反映されづらいアンケート用紙からも得難い情報である。これらの個別のエピソードの積み重ねは、博物館教育の今後の展開のみならず、博物館の存在意義や、これからの博物館の在り方を考えるための一助になると考えている。

最後に、本課題が重きを置く「ハンズ・オン」と「対話」、すなわち「さわる」「話す」体験については、これらの行為が、人間が何かを認識したり考えたりする際に欠かすことのできない行為であると再認識することになった。研究を通じて、博物館における「さわる」行為には、「関心が湧く」「複雑な情報も理解しやすい」「視覚以外で対象を認識できる」という効果があり、「話す」行為には、「感覚を言語化して整理できる」「感動を共有できる」「自分に合った情報を得られる」効果があることが明らかになった。新型コロナウイルスの影響で活動が中止となり、様々な代替手段を試した結果、情報技術を使ってそれらを部分的に体験することはできても、複合的で豊かな体験を、誰もが簡単にアクセスできるようにするには課題が多いことも明らかになった。

今後の計画としては、新型コロナウイルスの流行が収束するまでは、感染症対策や代替手段を実施し、従来のように「さわる」「話す」プログラムが再び実施できるようになった時に、本研究の成果を活かした新たな実践を行いたいと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 水谷 亜希	4. 巻 2
2. 論文標題 コロナ禍で再認識した「さわる」「話す」の重要性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 美術による学び	6. 最初と最後の頁 n/a~
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34495/artmanabi.202108	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 水谷亜希・烏賀陽梨沙	4. 巻 42
2. 論文標題 京都国立博物館におけるボランティア活動の展開とその意義 京博ナビゲーター	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 学叢	6. 最初と最後の頁 12-13, 59-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 京都国立博物館 編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 京都国立博物館	5. 総ページ数 20
3. 書名 京博ナビゲーター活動記録 2014(平成26)～2020(令和2)年	

〔産業財産権〕

〔その他〕

オープンアクセス
 「京博ナビゲーター活動記録 2014（平成26）～2020（令和2）年」PDF
https://www.kyohaku.go.jp/jp/culture/pdf/knm-navigator_20210226.pdf

「来館者と博物館の間に 京博ナビゲーター」WEBページ
 よみものweb No.208 京都国立博物館だより10・11・12月号（2020年10月1日発行）より
https://www.kyohaku.go.jp/jp/learn/home/yomimono_data/0108/

その他実績
 【セミナー 講師】水谷亜希「京都国立博物館におけるボランティア活動について」兵庫県立美術館ミュージアム・ボランティアコーディネーター養成セミナー、兵庫県立美術館、2022年2月27日

【トークイベント・ワークショップ スピーカー】水谷亜希「美術を作る・見る・語る」ゲストスピーカー、京都歴史文化施設クラスター実行委員会・京都市学校歴史博物館、2021年3月7日

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	山本 英男 (YAMAMOTO Hideo)		
研究協力者	朝賀 浩 (ASAKA Hiroshi)		
研究協力者	尾野 善裕 (ONO Yhoshi riho)		
研究協力者	宮川 禎一 (MIYAKAWA Teiichi)		
研究協力者	古谷 毅 (FURUYA Takeshi)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	浅湫 毅 (ASANUMA Takeshi)		
研究協力者	浅見 龍介 (ASAMI Ryusuke)		
研究協力者	山川 暁 (YAMAKAWA Aki)		
研究協力者	大原 嘉豊 (OHARA Yoshitoyo)		
研究協力者	降幡 順子 (FURIHATA Junko)		
研究協力者	伊藤 信二 (ITO Shinji)		
研究協力者	永島 明子 (NAGASHIMA Meiko)		
研究協力者	羽田 聡 (HADA Satoshi)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	呉 孟晋 (KURE Motoyuki)		
研究協力者	降矢 哲男 (FURIYA Tetsuo)		
研究協力者	末兼 俊彦 (SUEKANE Toshihiko)		
研究協力者	福士 雄也 (FUKUSHI Yuya)		
研究協力者	井並 林太郎 (INAMI Rintaro)		
研究協力者	森 道彦 (MORI Michihiko)		
研究協力者	安部 真里奈 (ABE Marina)		
研究協力者	近藤 無滴 (KONDO Muteki)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	中屋 菜緒 (NAKAYA Nao)		
研究協力者	久永 昂央 (HISANAGA Akihisa)		
研究協力者	リンネ マリサ (RINNE Melissa)		
研究協力者	趙 ウニル (CHO Eunil)		
研究協力者	周 思敏 (ZHOU simin)		
研究協力者	ヘルフェンベルガー ファビエン (HELFENBERGER Fabienne)		
研究協力者	河合 優香 (KAWAI Yuka)		
研究協力者	作花 麻帆 (SAKKA Maho)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	門前 斐紀 (MONZEN Ayaki)		
研究協力者	湯本 美紀 (YUMOTO Miki)		
研究協力者	烏賀陽 梨沙 (UGAYA Risa)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関